

第3章

自閉症・情緒障害特別支援学級での指導・支援

～力をつけて，通常の学級，学年等につなげる～

自閉症・情緒障害特別支援学級に在籍する子どもたちにとって，安心した生活の中で学び，力をつけることで自信を深め，かかわる集団の規模が広がっていくことは，将来の自立と社会参加に向けた重要な取り組みの一つといえます。

そのために，まずは自閉症・情緒障害特別支援学級での学習や生活を丁寧に行います。その子どもの思いに寄り添って作成した「個別の指導計画」を活用し，PDCA（計画→実践→評価→改善→）サイクルの手法で，計画的・継続的な支援を行しましょう。

また，「交流及び共同学習」等を設定し，かかわる集団の規模を広げる中で，特別支援学級でつけた力が日常生活に広がるようにしていきます。このとき，交流及び共同学習のねらいが明確なこと，そして，子どもが必要感をもっていることが大切となります。

この章では，自閉症・情緒障害特別支援学級に在籍する子どもが，特別支援学級で障害による困難さの改善，克服につながる力を向上させ，交流及び共同学習等により通常の学級とのかかわりを深めたり，学年や全校の活動に参加したりする事例を紹介します。

事例 28

情緒面の安定を図り、大きな集団での学習につなげて

～担任間の連携で、原学級での学習時間を増やした事例～

4年生のサトシさんは、低学年の頃から多動性・衝動性が強く、対人関係のトラブルがありましたが、自・情障学級での学習を重ね、落ち着いて学習できる時間が増えてきました。そこで、次のステップとして、大きな集団の中で学習する力を伸ばしたいと考え、原学級担任と連携しながら落ち着いて学習できる環境を整え、本人と相談して段階的に原学級で学習する時間を増やしていった事例を紹介します。

◇ 低学年の姿から

サトシさんは元気で運動能力も高いのですが、動きが激しく、友だちに対する攻撃的な言動が多かったため、注意される場面が多くなっていました。周囲の保護者からも、乱暴な子とみられ、母親も孤立ぎみでした。また、勉強はやっても分からないと感じ、自分に向けられた一つ一つの言葉に過敏に反応するので、「授業の妨害をしている困った子」と見られがちでした。自・情障学級においても、学習課題に集中できる時間は限られており、些細なことで感情的になる場面がみられました。

◇ 自己肯定感を高めるために

自・情障学級のタナカ先生は、サトシさんには二次的な不適応状態が出ているのではないかととらえました。そこで、サトシさんの興味関心を大切にしたい学習活動をたくさん取り入れ、自分の得意なことに思い切り取り組み、その活動が評価され、自信をつけることを当面の教育課題に設定しました。

サトシさんは、身体全体を使った活動に興味を示し、工作など物を作る活動は大好きでした。のこぎりや金づちを上手に使うことができるので、タナカ先生は、サトシさんと一緒に花壇の柵や看板などを作りました。時には管理技術員さんも一緒に手伝ってもらいました。その働きを多くの先生方にほめてもらうことで、サトシさんは自信をつけていきました。サトシさんの表情は穏やかになり、少人数の集団の中では、落ち着いて課題に取り組む姿も見られるようになりました。

◇ 社会性を高めるために

サトシさんが、落ち着いて課題に取り組む時間が伸びてきたので、人との適切なかかわり方を学ぶ場面を計画しました。制作活動に必要な材料を買う場面では、実際に校外に出かけ、店員さんへの依頼の仕方など、体験を通して学習しました。また、特別支援学級内の自分より年下の児童とかかわる活動も設けました。年下の児童に対しては、自分の要求を抑えて遠慮しながら伝える場面がみられるようになり、そうした心遣いができた場面を大いに認めていきました。

こうした学習を通してサトシさんにも変化がみられました。それまで「1組（サトシさんの原学級）なんか絶対に行かない」と言っていたのですが、休み時間や放課後、自ら原学級に行く姿がみられました。情緒の安定が図れ、自信もついてきたので、次のステップに進める段階にきていたのでしょう。タナカ先生は、個別の指導計画の中に、段階的に大きな集団の中で学習できるようにするための具体的な方向がなかったことに気付きました。すぐに、原学級の担任と相談し、どの場面でどんな支援があれば一緒に学習していくことが可能なのか検討していきました。

◇ 周囲の理解を高めるために

特別支援学級の教室には、休み時間になると多くの児童が訪ねてくる開放的な雰囲気があり、原学級の児童も、頻繁に教室に顔を出していました。そこで、タナカ先生がサトシさんの作品を紹介すると、子どもたちはサトシさんの新たな面に気づき、見直した様子がみられました。

サトシさんのよさをもっと知ってもらいたいと考えたタナカ先生は、原学級で2時間、特設の授業を行うことにしました。そこでは、障害の疑似体験を通して、人間にはさまざまな特性があり、誰もが苦手な面を持っていること、そしてそれは本人の努力ではどうしようもないこと、みんな違ってみんな素晴らしい面をもっていること等を伝え、支えあうために何が大切なのかを一緒に考えました。また、4年生の具体的な姿を通して、友だちとのかかわり方のよさを認めるようにするとともに、特別支援学級ではどんな学習をしているのか紹介していきました。加えて、保護者向けのお便りで発達障害の理解と対応の仕方について紹介し、学年PTAでも発達障害の理解につながる話をする機会を設けました。

◇ 原学級での学習をすすめるために

原学級で学習していくステップとして、まずはサトシさんが得意な教科から一緒に学習していく時間を増やしていきたいと考え、体育・図工・総合の時間での学習場面を検討しました。タナカ先生は、原学級の教室にいられないと感じた時に黙って出てしまうのではなく、担任に言葉で伝えてほしいと考え、学習のルールを再確認する時間をとりました。その上で、原学級ではサトシさんの座席を担任の近くに配置し、同じグループに穏やかに自己主張することができるメンバーを加え、1時間の学習の見通しを必ず黒板に提示するようにしていきました。

さらに、本人が自信をつけてきた算数でも一緒に学習できるように、タナカ先生は、サトシさん用の学習カードを用意し、課題が終わってしまった後に具体的に何をすればいいのかを書いて示しておくなどの対応の仕方を担任の先生と相談していきました。

◇ 担任間での連絡を大切に

こうしてサトシさんは、少しずつ大きな集団の中でも落ち着いて学習することができるようになってきました。しかし、慣れてくると、友だちとのかかわり方に新たな課題が出てきました。サトシさんは、相手の気持ちを考えずに、思ったことを言うってしまうため、友だちを傷つけてしまうのです。トラブルが起きてしまった時にはすぐに担任間で連絡を取り合い、サトシさんが落ち着いた時に、特別支援学級で「サトシさんの言葉で相手はどんな気持ちになってしまったのか、どんな伝え方がいいのか」を考える時間を設けました。また、原学級でも攻撃的ではない自己主張の仕方を学習する時間を設け、担任はサトシさんが学んだ方法で話すことができた時には、すぐその場で称賛するようにしました。どの場面でも同じように支援することで、大きなトラブルは減少し、落ち着いた生活ができる時間が増えつつあります。

事例から学ぶ

自・情障学級において個別の指導計画を作成する段階では、情緒面の安定や社会性を伸ばしていく観点を大切にしていきます。しかし、忘れてしまいがちなのが、長期的な視点で、少しずつ大きな集団の中で学習できるような支援を検討することです。支援の継続性を保ち、より大きな集団でも落ち着いて学習活動に参加できるように支援するためにも、日頃から担任間でその子どもものちょっとした変化を伝え合い、情報交換ができる関係をつくっておきましょう。

事例 29

全職員の共通理解による支援

～「可能性の芽」から「できる状況づくり」へ～

小学校入学当初から、全校集会や行事の際、歩き回ったり不適切な言葉を発したりするなどの行動が見られたコウジさん。1年生の3学期には、全校集会に「めんどくさいから行かない」と言って参加しないことも増えました。2年生になり個別の指導計画を更新する上で、可能性の芽をとらえ直し、教育課題を見直しました。そして、コウジさんにかかわる教師だけでなく全職員で共通理解を図り、みんなで教育課題を確認し支援を考え合いました。こうした取り組みによって、少しずつ変容していったコウジさんの姿を紹介します。

1 可能性の芽のとらえ直しと教育課題の見直し

2年生に進級した自・情障学級のコウジさん。個別の指導計画を更新するために、日常生活の姿をあらためて見返し、可能性の芽をとらえ直してみました。そして、教育課題を見直しました。
(全校集会にかかわる部分を抜粋)

日常生活の姿

- ・集団での活動が苦手で参加を渋ることがあるが、あらかじめ見通しがもてるように予告したり、仲のよい友だちに誘われたりすると参加できる。
- ・頑張ったり我慢できたりしたときに、スキンシップを交えたり、ごほうびシールなどを使ったりして称賛されると、うれしくて、もっと頑張ろうとする。
- ・興奮したときに、自分からその場を離れても、何とか落ち着こうとすることがある。



可能性の芽

- ・見通しがもてたり、仲のよい友だちと一緒にだったりすると、体育や音楽、集会など集団での活動に参加することができそうである。
- ・頑張ったことに対する称賛やごほうびシールがあれば、めあてに向かってもっと頑張ろうとするだろう。



教育課題

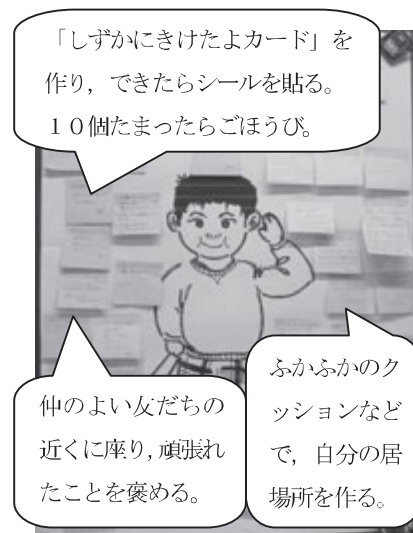
- 全校集会では原学級の列の横か後ろで、仲のよい友だちと集会の終わりまで参加することができるようになる。(第一回支援会議で修正したもの)
- 事前に本人と相談をして約束を決め、終わったときに教師と一緒に約束が守れたかどうか振り返ることができるようになる。

コウジさんにかかわる職員が集まって一回目の支援会議を開き、教育課題を検討しました。そして、コウジさんが同年代の大きな集団の中で、状況に合った行動に意識を向けられるようになっていってほしいという願いを共通理解しました。そこで、支援のしやすさも考え、「全校集会では原学級の列の横か後ろで、仲のよい友だちと集会の終わりまで参加することができるようになる」と教育課題を修正し、実現に難しさはあるけれども、その実現に向けて全職員で支援の方法を考えていくことにしました。

2 全職員による支援会議

コウジさんに対する支援を共通理解した上で、職員が全校集会での支援にかかわるために、学級担任、専科はもとより、学校生活にかかわる図書館司書、用務員が参加する支援会議を行いました。それは、体育館の中を歩き回ったり、大きな声を出したりするコウジさんに対してどうかかわったらいいのか、全職員の課題でもあったからです。

「全校集会では原学級の列の横か後ろで、仲のよい友だちと集会の終わりまで参加することができるようになる」という教育課題について、それぞれ自分だったらどんな支援を考えるか付箋紙に書き、発表しました。さっそく担任は、提案されたアイデアの幾つかを具体的な支援として「できる状況づくり」に生かしていました。



＜アイデアが書かれた付箋紙で
いっぱいになった模造紙＞

3 コウジさんへの支援の実際

「可能性の芽」や支援会議での提案をもとに、全校集会の前日や当日朝、時間や内容などを本人に伝えたり、参加の仕方を約束したりすることにしました。「マサシくんといっしょにいく」「りょうち（座る場所）の中にいる」「あばれない」「つばをはかない」など本人と相談しながら、毎回三つ約束を決め、カードに書いておきました。全校集会が終わるたびに教師と一緒に振り返り、約束が守れたらその場で称賛し、頑張った分だけシールをはって頑張りが目に見えて分かるようにしました。そして、自・情障学級のみんなが同様にシールを100枚貯めたら校外学習に行くというみんなのめあてを位置付けました。また、コウジさんの座る場所が分かるように、体育館の床にビニールテープをはって「りょうち」を作ったり、安心できるようにお気に入りの小物を持っていくことも認めたりしました。最後まで頑張って参加できたときには、多くの職員が「頑張ったね」「静かにできたね」と称賛の声掛けをしたり、一緒に喜んだりしました。

4 コウジさんの変容

初めは全校集会に参加することを嫌がったり、動き回ったりしたコウジさんですが、支援をしていく中で少しずつ変化が見られ始めました。いろいろな先生が声を掛けたり、手をつないで一緒に自分の場所に向かったりすると、自分の「りょうち」にすっと座るなど、動き回ることが減っていきしました。そして、体育館に入ると自分から座る場所に入ることも増えてきました。大きな声を出してしまうことはまだ時々ありますが、以前に比べるとずいぶん我慢ができるようになっていきました。全校集会の後、担任と話をしながら「暴れなかったよ。だから○（まる）」「ちょっと騒いじゃったね。△（さんかく）かな」と振り返ることを繰り返す中で、動き回ったり、騒いだりすることは少しずつ減り、全校集会の終わりまで参加できるようになってきています。

事例から学ぶ

どう支援したらいいのか分からず、苦しい時があります。そんなとき、その子どものプラス面にもう一度目を向けてみましょう。それが「可能性の芽」のとらえ直しにつながり、そこから「できる状況づくり」を考えることができます。その際、一人で抱えこまず、支援会議を開くなどできるだけ多くの人からのアイデアを集めることはとても有効です。また、支援について全職員が共通理解することで、直接かかわる教師だけでなく、多くの職員が支援することができます。支援の困難さを感じる子どもには、全職員での共通理解の上に立った支援を進めていきましょう。

事例 30

個別の学習でつけた力を

原学級での学習に生かして

～担任間の連携を大切にし、原学級につないだ事例～

ヒロシさんは、小学校1・2年生の頃、ささいなことで教室から飛び出すことがありました。教育相談を重ねて自・情障学級に入級し、自分に合った方法でじっくり学習を続けることで、できることが少しずつ増えてきました。4年生になった今、原学級の友だちと一緒に学びたいという願いを持つようになり、原学級の担任と連携して、段階的に一緒に教科学習に取り組む時間を増やしていった実践を紹介します。

◇ 困っていたヒロシさん

4年生になったヒロシさんは、1年生の頃の自分を振り返ることができるようになりました。「先生の話聞いていられなくて、つまらなくなると教室を抜け出してふらふらしていたよ」「今も頑張ろうと思うんだけど、少しでも気になることがあると、じっと止まっていられないんだ」普段はとても優しい面をもっているヒロシさんですが、時々パニックを起こして大声を出してしまうので、なかなか自分のよさを友だちに認めてもらえないことが悩みでした。

◇ 本人の得意な力を探りながら

特別支援学級のシミズ先生は、諸検査を実施してヒロシさんの特性を探るとともに、一対一でじっくりかかわる時間を大切にしました。初めは「むり」「やらない」といった言葉が多かったヒロシさんですが、自分の好きなこと・得意なことについて、たくさん話をするようになりました。特に大好きなキャラクターの話になると、細かなところまでとてもよく知っていることが分かりました。落ち着いて会話をする時間が増えると、「先生、マスクしているけれど大丈夫なの？」と、相手を気遣う言葉も出てくるようになり、シミズ先生はとてもうれしくなりました。

検査の結果からも、本人の得意な力が明らかになってきました。ヒロシさんは全体を捉えることが得意で、視覚的なヒントを基に類推していく力が得意なことも分かりました。また、ものごとを素早く処理していく力も得意であることが分かりました。

そこで、次の2点を大切に、個別の指導計画を作成していきました。

- ・達成可能な身近な目標を設定し、それをやり遂げる経験を大切にする
- ・パズルや視覚的なヒントを入れた教材を用いて、読み書きの基礎的な力をつける

◇ 指導の実際から

書くことが極端に苦手なヒロシさんは文字を書くことに強い抵抗がみられました。本人は書き順に従って一つ一つ覚えていく方法は苦手で、文字をパッと見て、形をとらえていく方法が得意でした。そこで、独自の方法ですでに覚えている筆順を修正することは避け、文字に絵を重ねてイメージ化して漢字を覚える方法に取り組みました。また、1時間に取り組む問題数を思い切って少なくし、漢字を幾つかのパーツに分けて覚えるプリントや漢字のパズルなど楽しめる教材を用意しました。併せて、眼球運動にも課題が指摘されたので、授業の後半には、パソコンを利用して楽しみながら視知覚をトレーニングする学習も取り入れていきました。

また、友だちと協力し、最後までやり遂げる経験をすることをねらって、知障学級と合同で社

会見学に出掛ける学習を計画しました。具体的で明確な目標があるので、これまで学習してきた力を生かして進んで学習に取り組み、課題への集中力や持続力が伸びていきました。

◇ 本人が意欲を持てる評価方法で

シミズ先生は、ヒロシさんが苦手な国語や算数の問題に進んで取り組むための工夫を進めました。この時間に取り組むプリント2枚をやり遂げたら、大好きなキャラクターのシールが1枚貼ってもらえ、さらにシールが10枚たまったら大きなシールがもらえるようにして、ファイルにプリントをためていきました。これを励みに、学習にも進んで取り組むようになり、参観日には、得意そうにファイルを母親に見せる姿が見られました。

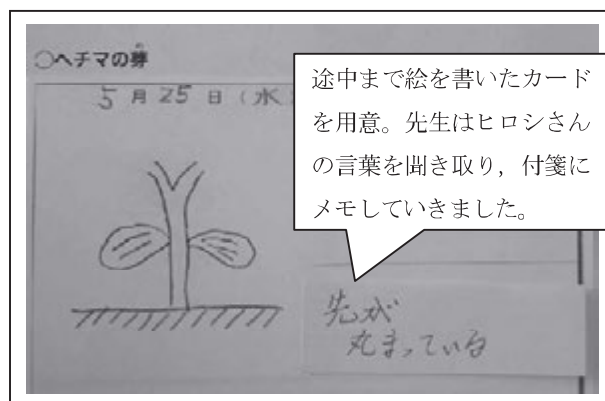
◇ 少しずつ自分の学年を意識する環境に

それまで、特別支援学級の教室では、人間関係に配慮して異年齢のグループで活動する場面も多かったのですが、教科学習の場面では、学年の違いをはっきり意識する環境づくりをすすめました。教室の中に、学年ごとの学習スペースを作って、原学級の友だちが現在取り組んでいる学習活動に関する掲示を多くし、原学級に戻った時に行う活動を意識付けていきました。

◇ 原学級との連携

ヒロシさんは、3年生の後半には、着席して学習に取り組むことができる時間が伸びてきました。そして、「4年生になったら理科に行ってみたい」という願いをもちました。観察や実験が大好きで興味をもっていたのですが、シミズ先生は不安でした。好きなことは自分でどんどん勝手に進めてしまい、準備やまとめの話を聞いていられない姿が容易に想像できたからです。そこで、原学級の担任と相談しながら、本人に合った支援の方法を検討していきました。

まず始めの数時間は、特別支援学級担任が付き添って理科の授業を受けました。授業の後に担任間で相談して、どのように課題を提示し、どのように声を掛けると落ち着いて参加できるか確認しました。また、特に待っていることが難しいと思われる場面に対応するために、休み時間や放課後を利用して、実験に使う道具などをあらかじめ見せておくようにしました。更に、ノートに書き込むことが難しい場面では、特別支援学級で取り組んでいる穴埋め式の学習カードを用意して書き込むか、特別支援学級に戻ってから学習してもいいことを確認していきました。理科で学習したことも、いつもの学習ファイルに書き込み、大きなシールを貼ってもらうことで、はりきって理科の授業に参加するようになりました。心配された「待つ場面」も、周囲の児童が上手に声を掛けてくれる場面が多く、自信をもって学習に参加しています。



事例から学ぶ

この事例のように、衝動的な言動がみられる子どもの場合には、情緒的に不安定な時期に無理に原学級で学習する時間を設けるのではなく、小集団の中で自分に合った学び方でじっくり学習に取り組み、自信をつけたところで段階的に通常の学級に戻る時間を増やしていく方が効果的な場合もあります。本人の状況を多面的にとらえ、関係者で十分に共通理解し、段階を見極めて少しずつ大きな集団での学習につなげていきましょう。

交流及び共同学習の場面では、ただ原学級で学習する時間数だけを設定してしまいがちですが、予想される困難点に対し、特別支援学級担任と原学級の担任が連携し、あらかじめ支援方法を打ち合わせておくことでスムーズに学習に取り組み、力をつけることができるように思います。

事例 31 友だちとのかかわりが苦手な子どもへの支援

～自・情障学級におけるソーシャルスキルトレーニング～

中学1年生のアキコさんは、同年代の友だちとのかかわりに苦手さがあり、イライラすると粗暴な行動をとったり、学校を休んだりしていました。

自分を理解する学習やソーシャルスキルトレーニングを通して、友だちと上手に距離をとれるようになったり、仲間に入ることができるようになったりした事例を紹介します。

◇困ったことを伝えるのが苦手なアキコさん

入学当初、アキコさんは通常の学級で学習していました。休み時間友だちは、テレビのドラマや男子の話で盛り上がっています。それらにまったく興味のないアキコさんは、だんだんと一緒にいることが苦痛になり、相談室に行くことが多くなりました。その後、自・情障学級に入級するようになったのですが、少ない人数の中でもうまくかかわることができず、そのイライラを家で発散させることが多くなってきました。アキコさんは友だちと一緒に話したい気持ちはあるものの、友だちの話題には関心がないので、「会話には入りたくない」と言っていました。話が合わない友だちと一緒にいたくないという気持ちから、日常生活や授業での集団行動にも支障が出るようになってきました。そこで、人とかかわりの面でのアキコさんの困難さを減らして、生活しやすくなることを願い、友だちとの関係づくりをターゲットとしてソーシャルスキルトレーニングを行うことにしました。

◇『みんなで仲よくしたい』 ～ 願いはみんな同じ ～

自・情障学級には常時5名の生徒が学んでいます。ほとんどの生徒は、感情が高ぶると抑えることができなくなってしまう傾向にあり、「これ、〇〇さんは知らないことだから無理よね」というような傷つく言葉を投げ掛けてしまうなど、友だちの気持ちを推測して場に合った言葉を使っていくことは難しい状況にありました。「相手の気持ちを傷つけない」「みんなで仲よくしたい」という願いはあるのに、日常生活の中で仲よくするためにどうしたらいいか分からない生徒たちでした。

そこで、『ソーシャルスキルトレーニングを行って、自分のコミュニケーションスキルを高めていこう』という目標を決め、学級全体で自立活動に取り組むことにしました。自分たちの願っていることを目標にしたので、全員、意欲的にスキル学習に取り組んでいきました。

ロールプレイを行うことにより、さまざまな役や立場を経験し、友だちの感じ方を知ったり、どのようにしていけばいいか考え合ったりするなど、それぞれのスキルの向上を目指して取り組んでいきました。

◇ロールプレイによる、ソーシャルスキルトレーニング

このロールプレイでは、「友だちと話したいが、会話の輪に入れず、イライラした気持ちを抱えている状況」を演じることで、それを乗り越えるためにはどうしたらよいか考えることを目的に行いました。

ステップ 1 ロールプレイ「友だちとのつきあい方」

1 設定 休み時間、B子、C子が二人でアニメの話題で盛り上がっている。A子、D男はそれぞれの席に座ったままである。

【A子の様子】

みんな、アニメアニメってうるさい！私はその話、知らないのに。どっか行ってほしいなあ。うるさくて本も読めやしない！



【B子の様子】

「あのアニメすごく面白いよね〜。」自分の好きな話題を話すのって楽しいなあ。あー楽しい！！



【C子の様子】

「だよね。主人公が格好いいんだよね。」B子さんと同じ話題が分かり、話が合う。あー楽しい！！



【D男の様子】

ぼくもそのアニメのこと知っているから話したいのに、うまく入れないや。残念だなあ。



2 体験・気づき・アドバイス 自分は、4人のどの立場にあてはまるか考えてみよう。実際に全ての役割を演じ、自分と違う立場の気持ちを感じてみよう。どうしたら、みんなが気持ちよく話せるようになるか、それぞれの立場に対しアドバイスをしてみよう。

【B子へ】

- ・ A子は、アニメに興味がないから、A子の知っている芸能人の話に変えてみよう。

【C子へ】

- ・ D男に、「昨日の夕食なんだった？」って聞いてみよう。
- ・ 声を小さくしよう。

【A子へ】

- ・ 皆の話に入りたいくはないときは、読書なんかもいいね。
- ・ 「音量下げて」と言おう。



【D男へ】

- ・ 「ぼくも見たいよ。」って、B子、C子に勇気をもって言おう。

3 体験・振り返り・工夫 友だちが考えたアドバイスを使って、再度ロールプレイをしてみよう。感想を述べ合おう。さらに工夫できること、もっとこうした方がいいところを変えて、演じてみよう。

4 一般化 自分が、このロールプレイの中でつかんだ使えるような言葉やスキルを、日常の場面でどんどん使っていこう。その中で、まだうまくいかない点を出し合って、更に考えていってみよう。



◇アキコさんの変化



【ロールプレイで学んだこと】

- ・人により興味や関心がある事は違うんだな。
- ・私のように思う人がいることを、友だちにも知ってもらえて嬉しい。
- ・自分からも話しかけてみよう。
- ・よし、今度、話が始まったら、本を読んでみよう。

スキルを学んだからといって、すぐに願うとおりのかかわりができるわけではありません。ときには、「こんなの習ったって無駄じゃん。だってまた同じことがあったもん」と、アキコさんが家で保護者に訴えたこともありました。しかし、このようなスキルを意識しながら生活していると、ほどよい距離感がお互いにとれるようになっていき、アキコさんにも自然に笑顔が見られることが増えてきました。

このようにして、子どもたちの生活の上での必要性に応じてソーシャルスキルトレーニングを行うことを続けていきました。

ステップ 2 一層素敵な自分になれるように、これからの目標を立てよう！！

自分の弱いところ

怒りっぽい

プラスでとらえると

感受性豊かな
情熱的な、素直な

こうしていこう

イライラの中から離れる
自分の好きな本を読む

ステップ 3 イライラ撃退スキルを使って、家でも自分らしく過ごすぞ！！

習ったスキル

話を聞いてもらう・ゆっくり深呼吸・10カウントダウン・趣味のことをする・音楽を聴く・アロマセラピー・クッションパンチ・好きなものを食べる・寝る・入浴

自分に合うスキル

自分の部屋で漫画の単行本を読む

現在高校生になったアキコさんは、問題にぶつかると学んだスキルを思い出し、自分なりに乗り越えていっているそうです。中学校時代、『楽しい』という表現ができなかった彼女から、「高校は楽しいよ」という言葉が出てくるようになったことを大変うれしく感じました。

事例から学ぶ

ソーシャルスキルトレーニングを実施する際に、トレーニングの項目や内容が先にあって、それに子どもを当てはめていくことはないでしょうか。参加する子どもの特性や困難さ、願いから創り上げていくことが大切であり、子ども自身の「ここをよくしたい。こうなりたい」という必要感と実態に合ったものであることが、効果を上げることに繋がっていきます。

自・情障学級では、ソーシャルスキルトレーニングは自立活動の項目「人間関係の形成」、「コミュニケーション」にかかわる大事な学習であり、教科の学習とともに一人一人の生き方を支える大切な学習となっていきます。人とのかかわりの苦手さの改善に向けて、ソーシャルスキルトレーニングが有効になるよう工夫して支援してみましよう。

事例 32

少人数の生活から集団の生活に つなげるための支援

～特別支援学級での学びを学年・学校全体に広げていった事例～

アキコさんは自・情障学級で、場に応じた行動や人との接し方を学び（事例 31 参照）、原学級や学年での学習に少しずつ参加し始めていました。

アキコさんが獲得してほしいスキルは、周囲の子どもにとっても必要な学習であると考え、学年や学校全体でもソーシャルスキル教育を行うことにしました。

通常の学級で学ぶ発達障害のある子どもたち、そして全ての子どもにとっても大切な学びの時間となったソーシャルスキル教育の様子を紹介します。

◇学年全体へのソーシャルスキル教育

コーディネーターや生徒指導係が中心となり、特別活動の時間などを使って、学年集会形式のソーシャルスキル教育を推進しました。子どもたちが積極的にかかわることで充実した学習になると考え、学年生徒会役員にモデル役や評価シールを貼る係を担当してもらい、学年生徒会の主体的な活動の場としました。子どもの中には、回数を重ねるにつれ、この時間を楽しみにする姿も出てきました。また、スキル学習振り返りカードには、日常生活の中で、スキルを上手に使えていた仲間への称賛の声も綴られ、子ども同士の自主的な高まり合いの姿も生まれるようになりました。

～ソーシャルスキル教育（SSE）の計画表～

〇〇中学校 SSE計画表

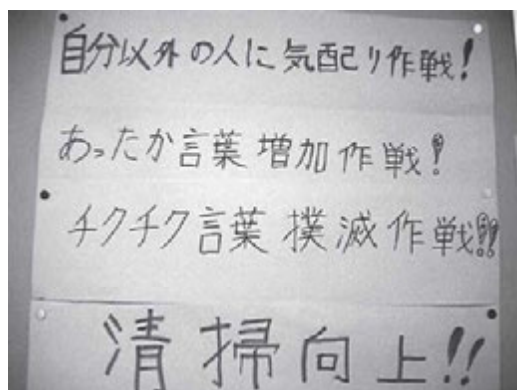
順	スキル名	ポイント	キーワード
1	ソーシャルスキルとは	スキルの意味と学ぶ意義を理解する。	
2	挨拶スキル	① 自分から先に ② 優しい声・表情 ③ 見てあげたを見る	先表情形
3	聞くスキル	① 口を閉じる。 ② 話す相手を見る。 ③ 最後まで聞く。	口目最後
4	話すスキル	① 手を挙げる。 ② 伝える相手に体を向ける。 ③ 声の大きさを考える。 (1, 2, 3) 大きさ→1. 隣の人と	手向き 声

【スキル学習のポイント】

- ・今まで持っていた技法や価値観はいったん捨て、全員で『新しく学ぶ』という意識での取組
- ・スキル学習がイメージ化して残るように、固定の場所、固定の指導者、パターン学習の展開
- ・楽しい学びでしか身につけていけない原理
- ・授業は導入、展開は日常生活、終末は自己評価
- ・変容させるには、『注意』ではなく『称賛』
- ・小さな変化に気づき、称賛できる職員・生徒・保護者の育成（学年だよりでスキル学習の様子を紹介し、家でも声掛けの協力依頼）

～学年のソーシャルスキルの学習風景～

～学年生徒会の目標～



～スキル学習の振り返りカード～

スキル学習を振り返って			
組 番 氏名			
1.	『話すスキル』を使うことは出来ましたか。	はい	まあまあ いいえ
2.	『話すスキル』を思い出すことはありましたか。	はい	まあまあ いいえ
3.	『思いやりスキル』を使うことは出来ましたか。	はい	まあまあ いいえ
4.	『思いやりスキル』を思い出すことはありましたか。	はい	まあまあ いいえ
5.	スキルを学ぶことは、自分にとって有効でしたか。	はい	まあまあ いいえ
6.	思いやり宣言は実行できましたか。	はい	まあまあ いいえ
7.	あなたが友達から受けた思いやりでうれしかったことを教えてください。 (→あとでこの内容をメッセージカードに書いてもらいます。)		
8.	スキルを使って良かったなということがあったら紹介してください。		
9.	スキルを使おうとして、難しかった、うまくいかなかったことがあったら教えてください。		

【スキル学習を学んでよかったこと】

学んで有効だったと答えた子どもは89人中86人

- ・友だちと更に仲よくなった。
- ・優しい言葉を使ったら会話が楽しくなった。
- ・話していて「何て言った？」と聞かれることがなくなった。
- ・あまり話さなかった友だちと仲よくなった。
- ・小さな声で放送されている時に聞くスキルでしっかりと耳をすませたので聞こえた。
- ・授業の挨拶のとき、話すスキルを使ったらみんな聞いてくれた。
- ・優しくなったねと言われた。
- ・あったか言葉を使うとよい気分になった。
- ・けんかがなくなった。
- ・皆が人のことを考えるようになった。
- ・人に思いやりをもって生活できた。

◇アキコさんの変容

自・情障学級で学ぶアキコさんが、原学級で過ごす時間が増えてくると、人との接し方で困ってしまう場面はいくつも生じてきました。「カラオケに行こう！」「今日アキコさんの家に遊びに行っていいい？」と友だちから声を掛けられた時、以前の彼女は、うまく断ることができませんでした。ですが、『断りスキル』を特別支援学級や学年全体で学んだことで、本人もスキルを使おうと努力し、「先生、スキルを使って断れたよ」と放課後、自・情障学級担任に報告するようにもなりました。また、周囲の子どもも、学年全体でスキルを学んだことで、「今、友だちはこれを断ろうとしているんだな」と、相手の気持ちを察しての対応が次第にできるようになっていきました。

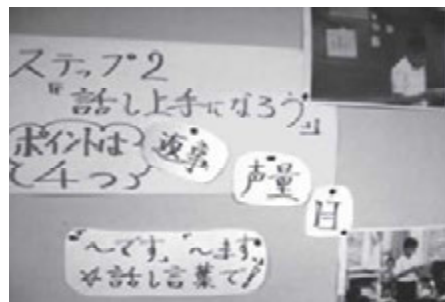
◇通常の学級で学ぶ発達障害のある生徒の育ち

通常の学級で学ぶ広汎性発達障害のあるフミヤさんは、仲間で飛び交う『ちくちく言葉』やルール違反が許せず、毎日イライラして生活を送っていました。相談室にクールダウンしに来ることもしばしばありました。しかし、学年全体でソーシャルスキル教育を行っていく中で、フミヤさんは自分の思いを言葉で表すことができるようになり、「〇〇くんたちは習ったスキルを使えていません、全く困ったものですね」などと笑って帰る姿も生まれてきました。

◇各学年で学んだスキルを全校で共有できるように

各学年の廊下にはスキル学習の様子が、各教室の黒板には今取り組んでいるスキルのポイントが掲示されています。子どもたちは、それぞれの学年の様子を見て「俺たちもやったよ。それは『ちくちく言葉』だろ」と共通の判断基準にもなってきています。上級生になるに従って学ぶスキルの内容が高度になるように組み立てていくと、上級生が下級生に対して自分たちはその段階は既に身に付けていることを語ったり、指導したりする姿も生まれ、見ていて頼もしくも感じました。

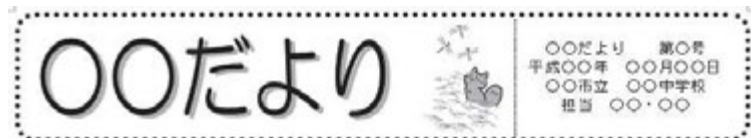
学校全体へソーシャルスキルを広げていくのは子どもたち自身だと改めて感じます。



◇学校全体へのソーシャルスキル教育

コーディネーターや生徒指導係が中心に、学校全体に向けたお便りを発行しました。人がかわり合って生きていくためのスキルを少しでも高めたり、コミュニケーションの楽しさを感じたりしてもらえたらと考え、ポジティブ・コミュニケーションの概念や、実際に仲間がトラブルを乗り越えた方法などを紹介しました。お便りを読んだ保護者の方々からも、「参考になりました」と感想を寄せられました。

～お便りに紹介した事例～



〇〇〇〇先生・〇〇弁護士さん・校長先生、みなさん言葉の大切さを私たちに教えて下さいました。それは、辞書も要らず、あえて勉強する必要のない、小さい子も大人もお年よりも知っている言葉。あとはこれらの言葉に心をこめるだけ。ここで〇〇らしさが生まれるのですね！！
※まだまだ自分の衝動性でちくちく言葉を使ってしまうあなたはぜひ相談室にお越し下さいね。先生と一緒にどうすれば押さえられるか考えていきたいと思います。



ポジティブ・コミュニケーションのお話②

前号では、リフレーミングのお話をしました。まず、自分自身がポジティブになろうということでしたね。（前号は読んでなかったという方は相談室に取りにお越しくださいませ。）自分が少しでも素敵に思えると、不思議なことに友達にもポジティブな声かけができるようになっていきます。そして、友達から〇〇ちゃんってこういう所すごいよね！と言われたら、先生ならとってもうれしくなって一日が明るくなってしまうます。ポジティブメッセージの矢印が行ったり来たりする学校。きっとグループ学習も集団学習も遊びも部活も楽しくなっていくことでしょう。

では今日は、別の方法を紹介します。『人生ののぞき窓』と言われるものです。エリック・バーンという人が自分や他者に対して人はどう感じているかをまとめています。それは『基本的心構え』と呼ばれています。

- ①私も他者もOKである。（自己肯定）
- ②私はOKではない、他者はOKである。（自己否定・他者肯定）
- ③私はOKである、他者はOKではない。（自己肯定・他者否定）
- ④私も他者もOKでない。（自己否定）

今オリンピックの優勝シーンを見ました。
①の窓から見ると：すごい！よくがんばったなあ。私も力をもらえたよ。スポーツって素晴らしい！
②の窓から見ると：いいねえ、金メダル。このあと、優勝するんだろうなあ。私なんて買いたいもの一つも買えないのに情けない。
③の窓から見ると：けっ、スポーツできるのがそんなに偉いか！一回勝ったくらいでおおはしゃぎするな。
④の窓から見ると：興味ないよ、つまんないなあ。

同じことが起こってもものぞき窓によって随分受け止め方が変わってしまうんですね。自分はこの窓から見ていることが多いでしょうか。②③④をウロウロ、ありますよね。でも早く窓を開け変えてあげれば、今の自分よりポジティブに歩んでいけますよ。人生はこの4つの窓から見る事ができ、それを選んでいるのは **あなた自身** なのです。

（1年生女子Aさん）

風邪で調子が悪くなったAさんにお母さんが、「一体だれが病院の支払いをしようと思っているの？」と一喝。そこでAさん、なんと反論したでしょう？「好きで風邪になったんじゃないんで、勝手に菌が私に入ったんだよ。風邪の菌のバカ。」するとお母さんは「そうだよねえ、風邪の菌がわるい！！」（〇〇）

（考察）もし「私だって好きでなったんじゃない、お母さんだってあるでしょ。お母さんはひどい。・・・」なんて返していたら、親子喧嘩のスタートですよね。風邪菌のせいにしたところが正解ですよね。

（1年生男子Bさん）

1年生はまだまだちくちく言葉が多いようです。今日もある人たちがBさんに、傷つく言葉を言いました。そこで、彼はこう返しました。「そんなに、ちくちく言葉を言いたいなら、ちくちく言葉専門学校（許可学校）にでも行って、思いっきり言えばいいじゃん。」そのあと、その言葉を言った人たちは彼に謝り、言われたBさんもすっきりした気持ちになったそうです。

（考察）よくある場面ですよね。言われたら、誰だって傷つくし落ち込みもします。やはり解決していきたいですよね。無視する、気にしない、先生に言う・・・いろんな方法はあるでしょうが、彼は自分に合った解決方法を見つけて事態を変えました。友だちを責めたりののしったりするのではなく、でも相手に悪かったと思ってもらえる方向を作り出したのです。お見事です。

事例から学ぶ

すべての子どもが、「みんなと仲よくしたい」と願っています。しかし、その願いを実現するために、どのように思いを伝えたらよいのか分からない子どもも多くいます。そんな時に、『こんな考え方やこんなスキルを使うといいよ』というソーシャルスキルの学習は、どの子にとっても大切な学習であると言えるでしょう。各学校の実情に合わせながら指導体制を工夫し、日常の中のちょっとした一言を変えていく位の目標設定で、継続的にやっていくことが、子どもたちの中に浸透していくようです。

そして、何よりも実際に使ってみてうまくいった経験や、少しの変化でも称賛してくれる仲間や大人の存在が、子どもたちのスキルを取り込む意欲につながっていきます。子どもの育ちを確実にとらえ、温かな声掛けや称賛により子どもたちを支えていきましょう。